幅 健司

●「ジャパン・パースペクティブ」コンサート

日本人ギタリストの幅 健司が、先日、「ジャパン・パースペクティブ」というタイトルのコンサートで演奏した。このイベントを主催したのはコンポーザーズ・ボイスという団体で、ニューヨーク市のザ・ジャン・ハス教会と作曲家のボックス・ノウバスとの共催だった。

コンサートのプログラムだが、ソプラノの小川響子とピアノの末広由美が小川崇作曲〈無名碑に捧げる哀歌〉を演奏、合屋正虎〈Call〉をスーザン・ダビト・マンデルのチェロと末広由美のピアノで演奏、北村ゆい〈A Milk Vetch Field〉をニューヨーク・フィルのコントラバス奏者である岡本 敏と同じくニューヨーク・フィルのクラリネット奏者パスクアル・マルティネス・フォルテサが演奏した。

幅 健司が演奏した〈15 minutes of fame〉は、15名の作曲家がコラボレーションしたもので、1人1分の長さで楽曲を作曲した。参加した作曲家は、藤倉 大、チア・ユ、アシュレイ・ジョン・ロング、サリム・ダダ、オスワルド・トレス・オルティス、トーマス・フリッピン、ジェイ・バクストナー、ジャスティン・ブリーム、ダグラス・ダシルヴァ、ジョセフ・エディソン、イマン・ハビビ、リチャード・プレッスリ、ジョン・トンプソン、クリス・ヴァイスビルの15名である。

●日本人ギタリスト、幅 健司

幅 健司は13歳でギターを始めたが、最初はエレキギターだった。

「家の近くに音楽学校がなかったので、本格的にギターを習うチャンスがありませんでした。しかし、音楽をいつも楽しんでいました。美濃市出身でしたから、常に都会にあこがれていました。高校を卒業後、大学に入るために東京に移りましたが、東京も私には充分でなく、海外に目が向き始めました」

「そして、2001年にニューヨークに近いコネチカットに行くことにしました。日本を離れるまで私は、常にニューヨークのことを考えていました。英語は中学校から高校まで必須科目でしたから、アメリカに来たとき、既にある程度は話せました。当初の計画では、コネチカット州ニューヘブンの語学学校に通って、4ヵ月間英語を勉強する予定でした。しかし、アメリカに数ヵ月住んでみて、アメリカの文化を勉強したいという興味がわいてきたので、大学に進学することにしたのです」

●渡米とクラシックギターへの開眼

2005年、彼は南コネチカット州立大学で会計学の学士号を取得した。同じ年にニューヨークの会計事務所に就職出来たのでニューヨークに移った。

ちょうどその頃、彼はアンドレス・セゴビアのCDを初めて買った。それを聴くことで、彼の人生が変わったと言う。

「『セゴビアとその時代：第6集』というタイトルのCDを買ったとき、私はセゴビアが誰だか知りませんでした。ただ、そのCDの表紙を飾っていた若いセゴビアの写真が気に入って買ったのです。そこで、彼が演奏したバッハの作品〈プレリュードBWV999〉を聴いたのですが、その時に私が受けた深い感動は、言葉では説明できません」

「当時、私は楽譜の読み方を知りませんでした。しかし、このCDが、私の進むべき道はギターであると強く感じさせてくれたのです。ニューヨークの公認会計事務所に会計士として採用されたばかりでしたけれども、私の心は音楽の虜になりました。毎日12時間働き、それから3時間練習するのは辛いことのように聞こえるかも知れませんが、私はそれを常に楽しんでいました」

「2年間オーレン・フェイダーとケビン・ギャラガーの指導を受けた後、2007年マンハッタン音楽院に入学して、マーク・デルプリオラに師事しました」

幅 健司は、2009年に、マンハッタン音楽院で修士号を取得している。

「私にとってニューヨークに住むことは特別な経験です。というのは、この小さなマンハッタン島に世界中から人々が集まってくるからです」

「この町は、私にとって小さな世界のようなものです。数多くの異なる文化を背景にして集まってくる人々に会って、話をすることが出来るのは、とても精神的に高揚します。彼らとの会話を通じて私の音楽性が改善され、世界観が広がっていきました。日本では人口の98パー

セントが日本人ですから、私がアメリカに来て多様な価値観を持った人々に囲まれていることは、とても新鮮な経験です。人々が、お互いに文化の違いを受け入れ、尊敬し、一緒に生活する姿を見るのは驚きであり、心を奮い立たせます」

「アメリカでは、食べ物の量から、バス、電車、道路、家具、書籍のサイズまで、すべてが大きいのです。初めてハンバーガーを食べにレストランに行ったとき、余りにもサイズが大きいので信じられませんでした。しかし、今では、当然のこととして、平気で食べています」

●日本人であること、ファースト・レコーディング

2010年、幅 健司とクラシック兼エレキギタリストのオーレン・フェイダーは、ニュージャージー日本人学校を訪ね、ギターに関するプレゼンテーションと演奏を披露した。

「私たちは、武満 徹、エリオット・カーター、ピアソラの作品を、ソロとデュエットで演奏しました。このイベントの数週間後に、生徒たちから100通以上の礼状と小冊子が送られてきました。これは今や私の宝物の1つです。日本語で書かれた手紙を読むのは素晴らしいことです。日本人学校で演奏したこと、そして日本語の手紙を貰ったことは、私にとって特別なことでした。それは、自分がどこから来たのか、自分が誰なのかを気づかせてくれたのです。これは、私が特別な存在になったという意味ではなく、自分を理解し、他人を理解しようと努力するようになったという意味です。こうした認識が、同時に私の音楽の演奏方法を変えました。演奏する時は、音楽的なアイディアだけではなく、作曲家のこと、その背後にある文化と歴史を考えるようになったのです」

2010年、幅 健司は『武満 徹の音楽』と題した彼の最初のCDをリリースした。(http://www.cdbaby.com/cd/kenjihaba参照)。

雑誌『ファンファーレ』が、このレコーディングを「独特なニュアンスの演奏」、「洗練された武満 徹の音楽に理想的にマッチしている」と表現している。

「私は、ニューヨークで音楽家としての自分自身を充分楽しんでいます。大勢の作曲家と会い、彼らの作品を演奏することが出来て幸せです。もちろんバッハの作品も毎日練習していますが、現在、私が主に取り組んでいるのは、コンテンポラリー・ミュージックの演奏です」

「コンポーザーズ・ボイスが、2011年に主催した第3回ギターコンサートに私を招聘してくれたのは、とても名誉なことでした。また、藤倉 大など有名な作曲家15人が1人1分の長さで作った作品を集めた〈15 minutes of fame〉という作品を、私が最初に演奏するギタリストになるという幸運にも恵まれました」

●チェロとギターのデュオ“インパルス”

2012年、幅 健司はチェロ奏者のスーザン・マンデルと組んで“インパルス”というチェロとギターのデュオを結成した。

「私がスーザンに会ったのはコンポーザーズ・ボイスを通じてですが、エキサイティングなプロジェクトが私たちの目の前にあります。まず初めに、アルゼンチンの作曲家マリソル・ヘンティルが、私たちのために曲を書いてくれました。私たちは、この曲を2013年9月に開くコンサートで世界初演します。2014年1月には、ニューヨーク市で開かれる室内楽コンサートの一員として、カーネギー・ホールのワイル・リサイタル・ホールで演奏します。2014年6月に開催されるコンポーザーズ・ボイス主催の第6回ギターコンサートでは、そのメイン・ゲストとして、私たちは招かれています」

●教授活動について

幅 健司は、もはや会計事務所では働いていない。代わりに、ニューヨーク市の彼のスタジオと、ニュージャージー州にあるベルゲン音楽アカデミーでギターを教えている。

「ギターを教えるということは、私の大好きな音楽を学生達と共有できるので、とてもエキサイティングな仕事です。学生と共有するものが何であるかは重要なことですが、同時にそれをどのように共有するかも重要なことです。その両面において、より良い指導者となるために、私は、毎日改善努力をしています」

幅 健司の生徒は、4歳の子供から大人までと幅広い。

「年少の生徒には、鈴木メソッドの一部を使用しています。“一部”というのは、鈴木メソッド全体ではなく、その考え方の一部分を活用しているからです。これは生徒にテクニックと音楽的基礎を発展させるのに役立ちます」

「大人の生徒には、レベルに応じた指導をしています。初心者の場合は、生徒たちが良く知っているフォークソングを編曲したものを演奏するように勧めています。そうすることによって、生徒がフレージングを理解し、ギターテクニックを学ぶのを手助けすることになるからです」

「その次に私が勧めているのは、ジュリアーニ、ソル、カルッリのエチュードなどを使って、テクニックをレベルアップさせることです」

「しかし、私が特に力を入れているのは、音楽とギターを楽しむ方法を彼らに示し、指導することです。1人のギタリストであり、指導者である私の旅は、まさに今始まったばかりです。ニューヨーク市で、このような道に進むことが出来たのは、本当に幸せです。私は、自分がこれからすることと、今日会う人々にわくわくしています」

幅 健司の次のソロ・コンサートは、マンハッタンのミッドタウンにあるセント・ピーター協会で、9月24日に開かれる。

詳細については http:www.habahabakenn.com/index.html を参照。